

# 近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型

荻原 祐二 (ogihara.yuuji.56u@st.kyoto-u.ac.jp)

[京都大学]

Characteristics and patterns of uncommon names in present-day Japan

Yuji Ogihara

Graduate School of Education, Kyoto University, Japan

## Abstract

This paper examined the characteristics and patterns of uncommon names in present-day Japan. Uncommon names have increasingly attracted a remarkable amount of attention, both in the academic field and in society at large. In order to capture the underlying nature of the phenomenon of giving uncommon names to babies, it is important as a first step to describe the characteristics of uncommon names and to systematically categorize them within a structured framework. However, past research mostly focused on names that were too unique and unclear about how they were to be read (*kirakira* names), which reflected partial and potentially misleadingly extreme aspects of the phenomenon. Moreover, previous research has used unique names that were possibly invented and hypothetical, which is not productive to understanding the actual phenomenon of giving uncommon names and might produce/reproduce “anecdotal names” or “urban legend names.” Therefore, in this article, names that were uncommon (not too unique) and real (not hypothetical) were examined. It is suggested that there are two ways of giving uncommon names: (1) giving an uncommon reading/pronunciation to Chinese characters and (2) giving uncommon Chinese characters. There are three typical ways of providing uncommon readings: (1-1) abbreviating the common reading of Chinese characters, (1-2) reading Chinese characters with the pronunciation of a foreign word that corresponds to its semantic meaning and (1-3) giving readings based on the semantic meaning of Chinese characters. In contrast, there are two typical ways of giving uncommon Chinese characters: (2-1) giving Chinese characters that are not encountered frequently in daily life and (2-2) including silent Chinese characters that add to the semantic meaning without contributing to the pronunciation. The characteristics of uncommon names and future directions in research investigating uncommon names in Japan were discussed.

## Key words

name, uncommon, unique, *kirakira* name, Chinese character

## 1. はじめに

本稿では、近年の日本における個性的な名前の特徴を体系的に記述し、その類型化を行う。個性的な名前の記述と類型化により、個性的な名前を取り巻く現象の本質的な理解と、命名者による意図された読み方の理解を促進することが可能になる。

近年、個性的な名前は広く日本社会の関心の的となっている。親は様々な想いや期待を込めて子どもの名前を決める。その際、他の多くの子どもと重複するような名前を避けようとして、多くの名づけ本やウェブサイトを読んだり、子どもの名づけに頭を悩ませる。実際、書店には多くの名づけ本が並んでおり、多くの民間企業（ベネッセコーポレーションや明治安田生命など）が新生児の名前ランキングや、個性的な名前に関するエピソード・由来などを広く社会に公開し続けている。また、個性的な名前の中でも、非常に個性的な名前が「キラキラネーム<sup>(1)</sup>」と呼ばれ、広く社会の耳目を集めている。ウェブ上では毎日のように個性的な名前の例が挙げられ、その個性度や社会的な是非について議論が交わされている。

日本における個性的な名前は、社会的に関心が高いだけでなく、学術的にも広く注目を集めている。名前は言うまでもなく言語の産物であり、個性的な名前に現れる言語的な特徴を検討することで、日本語の有り様やその変化を明らかにする言語学的なアプローチが取られている（例えば、佐藤, 2007）。特に、表意文字である漢字と、表音文字であるひらがな・カタカナを名前に用いる点、そして名前に用いられる漢字の読みの自由度が高いという点でも、日本は漢字文化圏の中で独自の漢字文化を形成・維持しており、興味深い研究対象と言える（例えば、阿辻, 2010; 笹原, 2015）。また、なぜ名前は個性的なものになっていくのか、どうして名前が読めなくなっているのかといった疑問を、世相の変化について幅広く叙述することで読み解き、日本社会の有り様を明らかにしていくという人類学・民俗学的なアプローチも進められている（例えば、小林, 2009）。さらに、個性的な名前には社会の趨勢が反映され、同時に個人の名づけが社会にも影響を与えたとする考えから、日本社会と日本人の有り様を定量的・実証的に探る社会学・心理学的なアプローチからも検討が行われている<sup>(2)</sup>（e.g., 荻原, 2015; Ogihara, Fujita, Tominaga, Ishigaki, Kashimoto, Takahashi, Toyohara, & Uchida, 2015）。さらに、医学では、救急外来を受診する子

どもの名前と、受診時間や緊急度、救急車利用率との関連が検討されている（松浦・筒井, 2015）。また、工学では、非常に個性的な名前の言語的特徴を調査し、非常に個性的な名前かどうかを自動判定するシステムの設計が試みられている（山西・大泉・西原・福本, 2015）。したがって、個性的な名前は、言語学・人類学・社会学・心理学などの人文・社会科学だけでなく、医学や工学を含めた自然科学領域からも検討が行われている、学際性と注目度の高いトピックの一つであると言える。

社会的・学術的に広く関心を集めている「個性的な名前」と一概に言っても、その個性の現れ方や程度には様々な特徴とそれに基づく類型があると考えられる。個性的な名前を取り巻く現象や、その現象の本質・背景を理論的・学術的に十分に理解するためには、個性的な名前がどのようなものかを明らかにすることが、まずは必要である。先述の通り、個性的な名前が人文・社会科学と自然科学の多くの領域で研究対象となっている現状を考慮すると、この作業の重要性は高い。例えば、個性的な名前の類型と、命名者の心理・社会・経済変数との関連を検討することによって、個性的な名前を与えるプロセスや動機を明らかにすることも可能と考えられる。

さらに、近年の個性的な名前に対する、命名者による意図された読み方の理解・解釈を促進し、誤読を少なくする確率を高めることができるという実践的・社会的な意義もある。自分の名前を間違われることは好ましいことではなく、他者の名前を誤ってしまうことは社会的にも望ましいことではない。特に、教師や医療関係者にとって、生徒や患者の名前を読み間違えたり、読めないという事態を避けることができる可能性が高まることは、望ましいと考えられる。

そこで本稿では、近年の日本における個性的な名前の特徴を記述し、その類型化を行う。

## 2. 個性的な名前の特徴とその類型

個性的な名前について議論する際には、少なくとも2つの点に注意する必要がある。第1に、個性的な名前と「キラキラネーム」と呼ばれる「非常に」個性的な名前を区別して論じる必要がある。個性的であるという点では共通しているが、その程度と、与えられる社会的な評価が大きく異なりうるからである。本稿では、個性的な名前を「頻度が相対的に低く、一般的でない名前」と定義する。その中でも「頻度が特に低く、非常に個性的であり、読むことが特に困難である名前」をキラキラネームとする。近年の日本では、周囲の子どもと重複してしまうようなありふれた名前を避けようとして、一般的で伝統的な名前からは少し外した個性的な名前が与えられている（Ogihara et al., 2015）。キラキラネームはその定義上、個性的な名前の中でも非常に頻度が低いため、極端な例が多く含まれ、現象の特定の一部のみを対象としている。また、以下でも触れる通り、キラキラネームの実例を述べると、その定義上、個人の特定につながり、その名を持つ個人に対する評価・批判につながってしまう危険性

もある。

よって本稿では、キラキラネームではなく、個性的な名前の特徴と類型化を行うことを目的とする。もちろん、キラキラネームそのものを研究対象とすることにも多くの意義があるが、本稿では、一般的な名前とは少しずらしたような、個性的な名前を対象に議論を行う。言い方を変えれば、**only one** となり得る名前ではなく、**uncommon** な名前について検討する。

第2に、実際に存在する（と強く推測される）名前のみを取り上げ、その特徴について議論する必要がある。ウェブ上や世間の噂では、非常に個性的な名前として様々な例が挙げられている。しかし、そうした名前が実際に存在するかどうかは不明なものが多い。実際には存在しないにも関わらず、いわゆる「逸話」や「都市伝説」などとして広く流布しているものも多く含まれている可能性がある。実際に、非常に個性的な名前を数多くまとめているサイトは、実在しない名前が含まれている可能性を自ら指摘している。そのような非常に個性的な名前そのものが問題というよりも、実在するかどうか分からない名前を、現実の代表例として取り上げ、論を進めることに問題がある。例えば、実際には存在しない名前を数多く取り上げ、その類型化を行っても、それは現実の名前を理解する際の枠組みにはなりにくい。加えて、そうした極端な例を敢えて用いることによって多くの批判・反感を生じさせてしまう危険性もある。そうした実在しない名前を取り上げることで、社会的な現実として作り出すことになり、「逸話」や「都市伝説」としての非常に個性的な名前と、それに対するネガティブな評価・評判を生産・再生産することに貢献してしまっているかもしれない。

よって、本稿では、実際に新生児に名づけられた名前を収集し責任を持って公開している民間企業のデータ<sup>(3)</sup>（ベネッセコーポレーションや明治安田生命相互保険会社、株式会社イーウェル）と、市町村の広報誌に実際に掲載されている新生児・幼児の名前<sup>(4)</sup>を用いる。

近年の日本における個性的な名前の特徴については、これまで様々な場で部分的に説明されてきた（例えば、ベネッセ, 2012; 小林, 2009; 佐藤, 2007）。しかし、上記2点を備えた上で、個性的な名前の特徴を体系的・構造的に整理しているものは少ない。徳田（2004）は、埼玉県の子供園2園に子どもを通わせている母親560名に対して2004年に調査を行い、読みにくい名前や読み間違えられる名前の特徴について検討している。その結果、読みにくい名前や読み間違えられる名前の特徴を以下の6つに分類している。①その漢字の音訓にない読み方をしているケース、②なじみのない漢字を使っているケース、③今までも目にした名前であるが、通常とは異なる読み方をしているケース、④その漢字の主な読みではない読み方をしているケース、⑤漢字の組み合わせになじみのないケース、⑥読み方が何通りもある字を使っているケース。

しかし、徳田（2004）も自ら指摘する通り、相互の分

表 1：個性的な名前の特徴とその類型

	種類	特徴	例
1. 読み	1-1 一部読み	一般的な読みの一部を用いる	心菜：ここな 心春：こはる 拓音：たくと 海音：かいと
	1-2 外国語読み	外国語（英語やラテン語・フランス語など）の読みを与える	海：まりん 光：らいと 月：るな 空：しえる
	1-3 イメージ読み	漢字の持つイメージを読みとして与える	星：あかり 月：らいと
2. 書き（漢字）	2-1 低使用頻度漢字	使用頻度が相対的に低い漢字を与える	宥斗：ゆうと 宥人：ゆうと
	2-2 読まない漢字	読まない漢字を含める	大空：そら 心結：こころ
3. 組み合わせ	1-2 外国語読み + 2-2 読まない漢字	外国語の読みを与えて、読まない漢字を含める	月雫：るな 愛月：るな
	1-2 外国語読み + 1-1 一部読み	外国語の読みを与えて、その一部を読む	琉月：るな 月菜：るな
	1-3 イメージ読み + 2-2 読まない漢字	漢字の持つイメージを読みとして与えて、読まない漢字を含める	輝星：らいと 大翔：つばさ
	1-3 イメージ読み + 1-1 一部読み	漢字の持つイメージを読みとして与えて、その一部を読む	希星：きらら 輝星：きらら

類が概念的に重複しているものが含まれてしまっている（例えば、①と③、④と⑥）。分類が独立した上でいくつかの分類に同時に当てはまることはあっても、分類そのものが概念的に独立していないことは説明を行う上で望ましくない。また、③や④、⑤は分類が読み手の能力や経験（世代や職業など）、主観に大きく依存してしまうため、客観的な基準とは言い難い。したがって、本稿ではこれらの先行研究を土台としながら、類型が概念的に重複せず、客観的な基準として機能するように、近年の日本における個性的な名前の特徴の記述と類型化を行う。

報告された個性的な名前を数多く目にする、大きく読みにおいて個性を出しているタイプ、書き（漢字）において個性を表出しているタイプ、そしてそれらの組み合わせを行うという、大きく3つの方法があることが伺われる。まとめを表1に示す。以下では、それぞれのタイプの特徴について順に述べる。

### 3. 読み

#### 3.1 一部を読む（1-1）

本来の一般的な読みを部分的に用いる方法である（例えば、ベネッセ, 2012; 佐藤, 2007）。例えば、「心」は「こころ」と読まれることが一般的だが、「ここ」と読み、「心菜（ここな）」（例えば、はっぴーママ, 2011; T 県 K 市広報誌, 2015）や「心美（ここみ）」（例えば、はっぴーマ

マ, 2011, 2013）などとして用いられている。さらに、「心」を「こ」と読み、「心春（こはる）」（例えば、はっぴーママ, 2011; I 県 T 町広報誌, 2014）や「理心（りこ）」（例えば、M 県 M 市広報誌, 2014; T 県 K 市広報誌, 2011）などとしても用いられている。また、「愛（あい）」を「あ」と読んで、「愛美（あみ）」（例えば、はっぴーママ, 2012; Y 県 Y 町広報誌, 2014）や「乃愛（のあ）」（例えば、はっぴーママ, 2010; T 県 K 市広報誌, 2012）といった名前がある。

また、読みの前半部分を用いるのではなく、後半部分を用いるパターンもある。例えば、「音（おと）」を「と」として読み、「拓音（たくと）」（例えば、A 県 T 町広報誌, 2014; 明治安田生命, 2009）や「海音（かいと）」（例えば、G 県 G 町広報誌, 2014; はっぴーママ, 2010）がある。また、「空（そら）」を「ら」として読み、「咲空（さくら）」（例えば、A 県 K 町広報誌, 2015; O 県 H 市広報誌, 2011）や「星空（せいら）」（例えば、はっぴーママ, 2013; H 県 Y 市広報誌, 2014）と読まれる。漢字の読みは、語頭から認知的に処理されるため、前半部分の音の方が、その漢字との結びつきが強いと考えられる。よって、後半部分の音のみを用いるものは、前半部分を用いるものと比較して、非典型性がより増して感じられ、個性的であるように思われる。一方で、名前の可読性は低くなっているようである。

さらに、漢字の読みの一部を用いる方法を連続させて、

「心愛（ここあ）」（例えば、はっぴーママ、2010; 2011）や「愛心（あこ）」（例えば、はっぴーママ、2008, 2009）といった名前も見られる。他にも、「希彩（のあ）」（例えば、A 県 T 町広報誌、2011; F 県 O 町広報誌、2008）や「空愛（そあ）」（例えば、M 県 K 町広報誌、2008; N 県 T 市広報誌、2013）のような例も見られる。

この用法は、近年初めて現れた訳ではなく、古くから見られるものである（例えば、佐藤、2007）。しかし、その使用頻度は過去よりも増加しているように見える。ベネッセによれば、漢字のもともとの読みを短くする傾向は 2008 年頃から増加し、2012 年には定着したとされる<sup>(5)</sup>（ベネッセ、2012; 2013）。データを用いた検証は行っていないが、近年の個性的な名前にはこの方法を使ったものが特に多いように思われる。

### 3.2 漢字を外国語で読む（1-2）

漢字に対して、一般的でない外国語の読みを与える方法である（例えば、佐藤、2007; たまごクラブ、2013）。例えば、一般的には、「海」は「かい」や「(う)み」と読み、「海斗（かいと）」や「拓海（たくみ）」、「七海（ななみ）」などと用いられることが多い。しかし、「海」に対して「まりん（Marine）」（例えば、C 県 T 町広報誌、2004; 明治安田生命、2011）という英語の読みを与えることが例として挙げられる。また、「光」を「らいと」（例えば、F 県 K 町広報誌、2014; I 県 C 市広報誌、2013）と読み、「騎士」を「ないと（Knight）」（例えば、明治安田生命、2011; T 県 K 市広報誌、2015）と読む例もある。こうした、一般的な読みではなく、英語読みを与えることで個性的な名前を与えていると言える。

また、英語だけではなく、他の外国語も用いられている。例えば、「月」に対して「つき」もしくは「づき」と読んで「美月（みつき）」や「葉月（はづき）」ではなく、ラテン語で月を意味する「るな（Luna）」と読む（例えば、はっぴーママ、2010; 明治安田生命、2011）。他にも、「空」と書いて、フランス語で空を意味する「しえる（Ciel）」と読む（例えば、A 県 H 市広報誌、2011; はっぴーママ、2009）といった例がある。

漢字を外国語で読むのではなく、外国語の単語の読みを漢字に当てはめて用いることはこれまでも比較的目にするものであった。例えば、ドイツ語で光を意味する「リひと（Licht）」は「理人」（例えば、はっぴーママ、2011; M 県 O 町広報誌、2008）や「理仁」（例えば、はっぴーママ、2011; 2012）などと書かれる。また、フランス語で天使を意味する「あんじゅ（Ange）」は「杏樹」（例えば、はっぴーママ、2012; 2013）や「杏珠」（例えば、はっぴーママ、2010; 2012）などとして与えられている。外国語の単語の読みを漢字に当てはめるのではなく、逆に漢字を外国語で読むことは、少なくとも現在の所、一般的でないように思われる。

この手法は、いわゆる当て字・当て読みの扱いとなる。日本において、当て字・当て読みの使用が更なる広がりを見せている（例えば、笹原、2010）ことと関連している

かもしれない。

### 3.3 漢字が持つイメージで読む（1-3）

漢字に対して、一般的な読みではなく、その漢字の持つイメージから読みを与える方法である（例えば、佐藤、2007）。例えば、「星」を「あかり」（例えば、明治安田生命、2008; O 府 H 市広報誌、2009）と読むことが挙げられる。また、「月」を「らいと」（例えば、A 県 O 町広報誌、2011; 明治安田生命、2008）と読み、「翔」を「つばさ」（例えば、F 県 F 町広報誌、2014; I 県 T 市広報誌、2012）と読む例がある。

この手法も、漢字を外国語で読む方法（1-2）と同様に、いわゆる当て字・当て読みと言える。

## 4. 書き（漢字）

### 4.1 日常的な使用頻度が相対的に低い漢字で書く（2-1）

日本の名前として用いられる頻度が相対的に低い漢字を用いる方法である（例えば、明治安田生命、2013; 徳田、2004）。読みとしては同じであっても、相対的な使用頻度の低い漢字を使うことで個性的な名前になり得る。例えば、「ゆうと」という読みは、明治安田生命とベネッセの名前ランキングによれば、2004 年から 2014 年まで常に読みのトップ 5 に入る、非常に人気のある読みである。この読みを、よく用いられる「悠斗」ではなく「宥斗」（例えば、K 府 K 市、2011; 明治安田生命、2012）や、「優人」ではなく「宥人」（例えば、明治安田生命、2013; T 県 K 市広報誌、2010）と書くことにより、個性を出しているようである。

加えて、「汰（たなど）」（例えば、はっぴーママ、2011; 2012）や「禮（れい・らいなど; 礼の旧字体）」（例えば、はっぴーママ、2010; 2013）などは、日常的な漢字の使用頻度としては相対的に低いが、名前として用いられている。それぞれの漢字には固有の意味や語源があり、親は子どもにその漢字を通して期待や想いを託している。また、画数の吉凶なども加味するために、日常の使用頻度の高い漢字をそのまま用いている訳ではないと考えられる。しかし、漢字の使用頻度が相対的に低いがゆえに、個性的な名前になりやすいと考えられる。

### 4.2 読まない漢字を含める（2-2）

名前の中に、特定の漢字を含めるが、それを読まない方法である（例えば、佐藤、2007）。例えば、「大空」（例えば、A 県 C 市広報誌、2013; M 県 M 市広報誌、2012）や「青空」（例えば、はっぴーママ、2014; M 県 M 市広報誌、2006）を「そら」と読むことである。「空」と書き、「そら」と読むことは一般的と考えられるが、新たに読まない漢字を含めることで、個性的な名前となっている。他にも、「こころ」という読みを、「心結」（例えば、A 県 K 町広報誌、2012; T 県 K 市広報誌、2015）や「心優」（例えば、はっぴーママ、2011; T 県 T 市広報誌、2014）と書く例がある。

この手法は、より鮮明で豊かなイメージや想いを伝えることを可能にしていると考えられる。「空」よりも、「大

空」や「青空」などの方が、どのような空をイメージしているのかを、より明確に伝えることができるであろう。そうすることによって、子ども本人や周囲の他者に、命名者の意図した思いや期待をより精緻に伝えることができると考えられる。

## 5. 組み合わせ

ここまで、読みと書き（漢字）それぞれで個性的な名前を与える方法について述べてきた。この読みと書きを組み合わせることで個性的な名前を与える方法もある。

例えば、漢字の外国語読み（1-2）を行った上で、読まない漢字を含める（2-2）方法である。例えば、「月雫」（例えば、I 県 O 市広報誌, 2014; 明治安田生命, 2008）を「るな」と読む。これは、「月」を「るな」と読んだうえで、「雫」という漢字を加えていると考えられる。同様の例として、「愛月（るな）」（例えば、明治安田生命, 2009; M 県 O 村広報誌, 2015）がある。

そのうち、漢字の外国語読み（1-2）を行った上で、一部を読む（1-1）方法と解釈できるものもある。例えば、「琉月」を「るな」と読む（例えば、O 府 T 市広報誌, 2009; T 県 S 市広報誌, 2007）のは、「月」を「るな」と読み、読まない「琉」を含めているのではなく、「琉」の「る」に「月（るな）」の「な」を与えたものとも考えられる。同様に、「瑠月」（例えば、M 県 T 町広報誌, 2007; T 県 T 市広報誌, 2014）や「月菜」（例えば、F 県 C 町広報誌, 2011; M 県 K 市広報誌, 2010）も「るな」と読まれている。

また、漢字のイメージを与えた（1-3）上で、読まない漢字を含める（2-2）方法もある。例えば、「輝星」で「らいと」（例えば、F 県 E 町広報誌, 2014; 明治安田生命, 2009）が挙げられる。また、「大翔」（例えば、A 県 K 市広報誌, 2014; 明治安田生命, 2012）や「飛翔」（例えば、T 県 T 町広報誌, 2004; O 府 S 市広報誌, 2011）で「つばさ」と読む。

そのうち、漢字のイメージを与えた（1-3）上で、一部を読む（1-1）方法と取れるものもある。「希星」を「きらら」と読む（例えば、はっぴーママ, 2009; 明治安田生命, 2007）のは、星を「きらら」と読み、読まない「希」を含めているのではなく、希（き）に星（きらら）の「らら」を与えたものとも考えられる。同様に「きらら」と読む例として、「輝星」（例えば、I 県 T 村広報誌, 2013; O 府 H 市広報誌, 2011）や「綺星」（例えば、A 県 S 町広報誌, 2009; 明治安田生命, 2009）がある。

組み合わせが複数行われるほど、個性度は高くなり、初見で命名者の意図した通りに読むことは難しくなると考えられる。

## 6. おわりに

### 6.1 本稿のまとめと意義

近年、個性的な名前に社会的にも学術的にも注目が集まっている。個性的な名前を取り巻く現象の本質を十分に理解するためには、個性的な名前の特徴や類型をまずは把握する必要がある。また、命名者の意図した読み方

を理解することによって、誤読の可能性を低下させるという社会的・実践的な意義もある。しかし、これまでの研究の多くは、一般的な名前から少し外したような個性的な名前であると同時に、実際に存在する名前を対象にして、その特徴や類型を体系的・構造的に説明していなかった。そこで本稿では、近年の日本において実在する個性的な名前の特徴を記述し、その類型化を行った。

近年の日本における個性的な名前には大きく分けて、読みで個性を出すものと、書き（漢字）で個性を出すものがある。読みで個性を出すものには、本来の読みの一部を用いるもの（1-1）、漢字を外国語で読むもの（1-2）そして、漢字が持つイメージで読むもの（1-3）があった。漢字には複数の読みがあるものが多く、名前の読みは元来容易ではなかったが、こうした方法の使用の増加により、名前の読みはより容易ではなくなっていると考えられる。一方、書きで個性を表出するものには、日常的使用頻度が相対的に低い漢字で書くもの（2-1）と、読まない漢字を含めるもの（2-2）があった。そして、これらの方法を複数組み合わせることも行われるようになっており、より個性的な名前が生み出されているようである。

本稿は、個性的な名前の特徴とその類型を整理することによって、個性的な名前を取り巻く現象の本質を理解するために必要な基礎的作業を行った。読みと書き（漢字）で個性を表出する方法があるが、それぞれ性質が異なるようである。実際、近年では書き（漢字）よりも、読みにおいて個性を表出する傾向が経時的に増加していることが指摘されている（Ogihara et al., 2015）。

本稿は、個性的な名前の特徴とその類型を理解することによって、命名者の意図した読み方の理解・解釈を促進し、誤読の可能性を相対的に低下させることにも貢献していると考えられる。名前を読めない、または読み誤ってしまう確率を低下させることは、社会的・実践的に意義がある。もちろん、名前には可能な読みが複数あることを考えると、意図された読みを完全に予測することは不可能である。しかし、近年の個性的な名前に対して、名前を読めないという事態を避け、類推の正確性を高めることができる。例えば、「琉月」という名前に出くわした際に、近年は漢字を外国語読みすることや、読みの一部を用いることがあることを知っていれば、読めないという状況を避けることができ、「るな」という推測が可能になるであろう。

### 6.2 限界点と今後の展望

本稿の限界点と今後の展望として、以下の2点を挙げる。第1に、本稿では近年の個性的な名前の中で、代表的と考えられるものを概観したが、本稿で示した個性的な名前の類型が、すべての個性的な名前を網羅している訳ではない。特に、本稿の主な対象ではないが、キラキラネームには、読みと書きの間に（外国語で読むことやイメージで読むことなどの）法則のない当て字を用いるものも多い。また、人名として倫理的に適切か疑問を抱かせるものもある。多くの人に知られる例として、「悪魔（あく

ま)」がある。「悪」も「魔」も常用漢字であり、法律上は名前に用いても問題がない。しかし、「悪」も「魔」も漢字が持つ意味としてはポジティブなものとは考えにくい。また、「あくま」という概念が人名に適切かどうかとも判断が分かれるところである。倫理的に適切かどうかは、個人の主観による要素も大きく、厳密な基準もないため判断は難しいが、行政は子どもの名前に悪魔と名づけるのは倫理上問題があるのではないかと判断し、広く社会で議論となった(最終的には「巫駆(あく)」として受理された; 詳細については例えば、安岡, 2011)。上記以外にも、個性的な名づけの方法は新しく生み出され続けていることを考慮すると、本稿で扱ったもの以外にも個性的な名前の種類はあると考えられる。

第2に、本稿で類型化した個性的な名前の種類と、命名者の心理・社会・経済変数との関連を検討する必要がある。同じ個性的な名前であっても、その個性の示し方には違いがある。本稿では、大きく読みと書き(漢字)の2つの方法があり、さらにそれぞれの方法に複数の類型があることを記述した。親の心理・社会・経済変数によって、これらの方法に系統的な違いがあるかもしれない。そうした関連を検討できれば、個性的な名前を与えるプロセスや動機を明らかにすることができると考えられる。

日本における個性的な名前は、高い社会的・学術的関心を集めているにも関わらず、少なくとも現在のところ、データに基づく定量的・実証的な研究が十分に行われているとは言い難い。本稿で行ったような、個性的な名前を取り巻く現象の構造的な記述を基礎として積み重ねながら、その背景にある理論についても定量的・実証的な検討を行うことができれば、社会的にも学術的にもより実りのある知見を生み出すことができるであろう。

## 謝辞

本稿に対して貴重なコメントを下さった竹村幸祐先生、中山真孝氏、内田由紀子先生、楠見孝先生に感謝申し上げます。

## 注

- (1) ウェブ上では、「DQN ネーム」と呼ばれることもある。しかし DQN ネームという用語は、非常に個性的で読むことが困難な名前であることに加えて、常識的には考えられない名前という意味を含んでいる。そして、そうした名前を与えた命名者に対して教養や常識のなさを批判し、軽蔑や侮蔑のニュアンスが含まれることが多いようである。本稿では個性的な名前を扱うが、その中でも非常に個性的な名前に焦点を当てる訳ではなく、常識的かどうかといった価値判断とも独立しているため、本稿では DQN ネームという用語は用いない。キラキラネームは、DQN ネームと比べてネガティブな意味合いは少なく、概してポジティブ、もしくはニュートラルであると思われる。
- (2) 名前は、社会現象の個別的記述を超えて、人間の心理・行動傾向を普遍的に説明する理論の構築にとって

も重要なトピックである。例えば、自分の名前に含まれる文字は、自分の名前に含まれない文字よりも概して好まれることが分かっている(ネームレター効果; Nuttin, 1985)。この現象は、日本(e.g., Kitayama & Karasawa, 1997)を含めた様々な国で確認され(e.g., Nuttin, 1987)、自身が自覚的に認知することが難しい潜在的な自尊感情を反映していることが指摘されている(e.g., Koole, Dijksterhuis, & van Knippenberg, 2001)。よって、この現象を扱うことで、自分自身に対する顕在的な自尊感情とは異なるレベルで自己への評価を測定できる。ゆえに、顕在的・潜在的な感情の区分や両者の関係、それらの社会・文化的な共通性と多様性といった新しい理論の構築に広く貢献し得る。本稿では、日本における個性的な名前を取り巻く現象の理解が主な目的であるため、名前を用いた研究が持つ理論的な貢献可能性や展望についての概観は別の機会に行うこととする。

- (3) もちろん、こうした民間会社によって収集された名前すべてが、実在する名前と断言することは難しいかもしれない。しかし、保険契約や出産祝いのお返しサービス、通信教育などにおいて偽名を使うことは考えにくい。また、他の個人情報(例えば、住所や電話番号)と共に公開されることは想定されていないので、偽名である可能性は低いと考えられる。
- (4) 地域の広報誌の出典を詳細に記述することは、個人の特定につながる可能性があり、匿名性の観点から望ましくないと考え、本稿では都道府県名と市町村名をアルファベットで記した。
- (5) しかし、2008年頃から増加したことや2012年に定着したことを示す定量的・実証的な分析や結果については公開されていない。

## 引用文献

- 阿辻哲次(2010). 漢字と日本人の暮らし. 大修館書店.
- ベネッセコーポレーション(2012). たまひよの名づけ. ベネッセコーポレーション. Retrieved from <http://womens.benesse.ne.jp/event/hakase/rank2012/index.html> (2014年9月30日).
- ベネッセコーポレーション(2013). たまひよの名づけ. ベネッセコーポレーション. Retrieved from <http://womens.benesse.ne.jp/event/hakase/rank2013/index.html> (2014年9月30日).
- はっぴーママ(2008). 名前ランキング & 名づけエピソード 2008. Retrieved from [http://www.happy-mama.com:8080/04\\_spc/naamae/04\\_33001.html](http://www.happy-mama.com:8080/04_spc/naamae/04_33001.html) (2015年11月2日).
- はっぴーママ(2009). 名前ランキング & 名づけエピソード 2009. Retrieved from [http://www.happy-mama.com:8080/04\\_spc/naamae/04\\_34001.html](http://www.happy-mama.com:8080/04_spc/naamae/04_34001.html) (2015年11月2日).
- はっぴーママ(2010). 名前ランキング & 名づけエピソード 2010. Retrieved from [http://www.happy-mama.com:8080/04\\_spc/naamae/04\\_35001.html](http://www.happy-mama.com:8080/04_spc/naamae/04_35001.html) (2015年11月2日).

- 日).
- はっぴーママ (2011). 名前ランキング & 名づけエピソード 2011. Retrieved from [http://www.happy-mama.com:8080/04\\_spc/namae/04\\_36001.html](http://www.happy-mama.com:8080/04_spc/namae/04_36001.html) (2015年11月2日).
- はっぴーママ (2012). 名前ランキング & 名づけエピソード 2012. Retrieved from [http://www.happy-mama.com:8080/04\\_spc/namae/04\\_37001.html](http://www.happy-mama.com:8080/04_spc/namae/04_37001.html) (2015年11月2日).
- はっぴーママ (2013). 名前ランキング & 名づけエピソード 2013. Retrieved from [http://www.happy-mama.com:8080/04\\_spc/namae/04\\_38001.html](http://www.happy-mama.com:8080/04_spc/namae/04_38001.html) (2015年11月2日).
- はっぴーママ (2014). 名前ランキング & 名づけエピソード 2014. Retrieved from [http://www.happy-mama.com:8080/04\\_spc/namae/04\\_39001.html](http://www.happy-mama.com:8080/04_spc/namae/04_39001.html) (2015年11月2日).
- Kitayama, S., & Karasawa, M. (1997). Implicit self-esteem in Japan: Name letters and birthday numbers. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23(7), 736-742.
- 小林康正 (2009). 名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク. 風響社.
- Koole, S. L., Dijksterhuis, A., & van Knippenberg, A. (2001). What's in a name: implicit self-esteem and the automatic self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80(4), 669-685.
- 松浦祐史・筒井一成 (2015). キラキラネームとER受診時間の関係. *小児科臨床*, 68(11), 2113-2117.
- 明治安田生命 (2008). 生まれ年別の名前調査 名前ランキング 2008. Retrieved from <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking-2008/> (2014年9月30日).
- 明治安田生命 (2009). 生まれ年別の名前調査 名前ランキング 2009. Retrieved from <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking-2009/> (2014年9月30日).
- 明治安田生命 (2010). 生まれ年別の名前調査 名前ランキング 2010. Retrieved from <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking-2010/> (2014年9月30日).
- 明治安田生命 (2011). 生まれ年別の名前調査 名前ランキング 2011. Retrieved from <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking-2011/index.html> (2014年9月30日).
- 明治安田生命 (2012). 生まれ年別の名前調査 名前ランキング 2012. Retrieved from <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking-2012/index.html> (2014年9月30日).
- 明治安田生命 (2013). 生まれ年別の名前調査 名前ランキング 2013. Retrieved from <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking-2013/index.html> (2014年9月30日).
- Nuttin, J. M. (1985). Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, 15(3), 353-361.
- Nuttin, J. M. (1987). Affective consequences of mere ownership: The name letter effect in twelve European languages. *European Journal of Social Psychology*, 17(4), 381-402.
- 荻原祐二 (2015). 漢字文化の維持と変容: 新生児の名前を用いた実証的検討.
- Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490.
- 笹原宏之 (2010). 「当て字」の広がり 三省堂ワードワイズ・ウェブ. Retrieved from <http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/2010/10/05/%E6%BC%A2%E5%AD%97%E3%81%AE%E7%8F%BE%E5%9C%A8%EF%BC%9A%E3%80%8C%E5%BD%93%E3%81%A6%E5%AD%97%E3%80%8D%E3%81%AE%E5%BA%83%E3%81%8C%E3%82%8A/> (2015年10月19日).
- 笹原宏之 (2015). 日本の名字と名前 大修館 国語情報室. Retrieved from [http://www.taishukan.co.jp/kokugo/webkoku/series004\\_10.html](http://www.taishukan.co.jp/kokugo/webkoku/series004_10.html) (2015年10月24日).
- 佐藤稔 (2007). 読みにくい名前はなぜ増えたか. 吉川弘文館.
- たまごクラブ (2013). たまひよ赤ちゃんのしあわせ名前事典 2014-2015年版. ベネッセコーポレーション.
- 徳田克己 (2004). 子どもの名前のつけ方に関する研究—読みにくい名前, 読み間違えられる名前を中心に—. *読書科学*, 48(3), 79-87.
- 山西良典・大泉順平・西原陽子・福本淳一 (2015). 人名の言語的特徴の分析に基づくキラキラネーム判定. 日本感性工学会論文誌 *Advanced online publication*.
- 安岡孝一 (2011). 新しい常用漢字と人名用漢字 漢字制限の歴史. 三省堂.
- (受稿: 2015年11月27日 受理: 2015年12月10日)